

東京湾における人とマハゼの関係史

東京海洋大学

准教授 工 藤 貴 史

千葉県水産総合研究センター

研究員 吉 野 暢 之

「水産振興」発刊の趣旨

日本漁業は、沿岸、沖合、そして遠洋の漁業といわれるが、われわれは、それぞれが調和のとれた振興があることを期待してあるので、その為には、それぞれの個別的な分析、乃至振興施策の必要性を、痛感するものである。坊間には、あまりにもそれぞれを代表する、いわゆる利益代表的見解が横行しすぎる嫌いがあるのである。われわれは、わが国民経済のなかにおける日本漁業を、近代産業として、より発展振興させることが要請されていると信ずるものである。

ここに、われわれは、日本水産業の個別的な分析の徹底につとめるとともにその総合的視点からの研究、さらに、世界経済とともに発展振興する方策の樹立に一層精進を加えることを考えたものである。

この様な努力目標にむかってわれわれの調査研究事業を発足させた次第で冊子の生れた処に、またこれへの奉仕の、ささやかな表われである。

昭和四十二年七月

財団法人 東京水産振興会
(題字は井野碩哉元会長)

目次

東京湾における人とマハゼの関係史

第五一六号

- 一. はじめに..... 1
- 二. マハゼの生態的特徴と東京湾の環境変化..... 3
- 三. 東京湾におけるマハゼ釣りの変遷..... 12
- 四. 東京湾におけるマハゼ漁業の変遷..... 27
- 五. おわりに..... 33
- 一人とマハゼのかかわりの再生にむけて..... 33

時事余聞 編集後記

工藤貴史
どうたかふみ

▽一九七〇年東京生まれ。一九九三年東京水産大学資源管理学科卒業。一九九七年同大学大学院博士後期課程中途退学。博士(水産学)。一九九七年東京水産大学助手、二〇〇八年東京海洋大学准教授(現在)。専門分野は、「人と魚と水の関係学」、漁業経済学、沿岸域資源論。著書に「水産資源管理学」、「漁業経済研究の成果と展望」、「わが国水産業の再編と新たな役割」(二〇〇三年、第十一号)、「漁業センサス分析」、「水産海洋ハンドブック」、「ポイント整理で学ぶ水産経済」(全て共著)がある。

吉野暢之
よしのぶゆき

▽一九八〇年東京生まれ。二〇〇四年東京水産大学資源管理学科卒業。二〇〇六年東京海洋大学大学院博士前期課程修了。修士(海洋科学)。「東京湾におけるマハゼ利用の社会史」(東京海洋大学修士学位论文)。民間企業勤務後、二〇〇七年より千葉県水産総合研究センター流通加工研究室研究員現在。水産物の鮮度保持、水産加工品の品質向上その他に関する試験研究を行っている。

時事余聞

◇：NHKの大河ドラマ「龍馬伝」が高視聴率を収め終つた。坂本龍馬の暗殺犯についてはさまざまな説がある。暗殺の場所と日付はおおむね各説とも共通している。しかし、誰がということになると説が分かれる。多数説は会津藩士佐々木只三郎である。この男は清河八郎を切つてい

る。講武所の師範代をつとめ、精武流の使い手、小太刀をとっては日本一といわれていた。

◇：薩摩が急変して長州と手を組むようになったその仲介者は坂本龍馬である。ただお互いの腹は「薩摩の輩は狸じゃ」「長州の狐に天下をとらしたら日本はむごいことなる」この狐と狸の仲たがいは明治維新のあととまで続く。肥後の横井小楠は龍馬を「乱臣賊子になる」とみていた。伏見宝来稿の寺田屋で龍馬が襲われたのは薩長同盟を成功させた三日後だった。この時は龍馬はピストルを持ち何とか逃げたのだった。

◇：河原町通りの近江屋という醬油屋がある。近江屋は大戸をおろしていたが耳門はあいていた。龍馬は来客の中

岡慎太郎と話していた。その時、来訪者の脇差が鞘走り、龍馬はのけぞり、床の間の刀をとうろとしたが、その右肩から左の背骨へこの太刀が肉を裂いて走った。その間に中岡慎太郎も切られていた。維新を担った土佐の中岡慎太郎と坂本龍馬はここで息絶えた。

◇：この二つの藩は気質もずい分違う。「長州人タイプ」といえば、分析能力がすぐれ、頭が良く、行政能力があり、政略的である。代表的人物としては伊藤博文、山縣有朋である。戦後でも岸信介、佐藤栄作の二人首相を並べる。興味をひくのは野坂参三、志賀義雄、宮本顕治といった日本共産党の三大人物も長州出身である。薩摩藩も鹿児島県と宮崎県の一部を占め七十五万石の大藩である。藩士の教育には徹底的に力をいれた。「敵を見て死を恐れるな」「弱者いじめをするな」など骨の髄までしみ込んでいる。幕府にかくれて対中国貿易をやり財政的には極めて豊かだった。両藩とも関ヶ原の負け組み。徳川氏へのうらみが伏流水のように地下に溢れていた。(K)

編集後記

東京湾のマハゼ釣りは懐かしい江戸の風物詩であった。六十歳前後の方は誰方でも一度や二度の経験はお持ちでないかと思ひます。マハゼについて実に詳しい説明がなされており、流石だとの感を深しましたが、「東京湾再生」のプロジェクトが構成されたとは力強い限りです。環境保全運動が高まる中で当然の動きと思ひますが、今後の活動に拍手を送りたい気がします。執筆者に改めて感謝申し上げます。

「水産振興」第五一六号

平成二十二年十二月一日発行

(非売品)

編集者 中澤 齊 彬

発行人

発行所

〒104-0055 東京都中央区豊海町五番九号
東京水産会館五階

財団法人 東京水産振興会

電話 ☎ 三三三三八一一

FAX ☎ 三三三三八一六

印刷所 (株)連合印刷センター

(本稿記事の無断転載を禁じます)

ご意見・ご感想をホームページよりお寄せ下さい。

URL <http://www.suisan-shinkou.or.jp/>

東京湾における人とマハゼの関係史

東京海洋大学

准教授 工 藤 貴 史

千葉県水産総合研究センター

研究員 吉 野 暢 之

一．はじめに

東京湾には多くの生物が生息している。そのなかでもマハゼは人とのかわりが深い生物である。マハゼは、人間の生活域に近い沿岸部に生息しており、初夏のころに

人とマハゼが接する場合は海辺で高度経済成長期とともにマハゼも変遷してきた

となると、水底の見える浅場をよく観察するとわりと簡単にその姿を確認することができる。古くは「江戸前」の釣りを代表する釣り物であり、今日においても夏になれば釣りをする人を見かける。また、マハゼは現在、魚売り場で見かけることはまずないが、老舗の天婦羅専門店などにいけば季節を彩る食材としてかかせないものになっている。マハゼは身近な魚であるという一面を持ちつつも、一方で今日においては人がかかわろうとしないあまりにかわりのない魚でもあるといえる。

人とマハゼが接する場である海辺は、戦後から高度経済成長期には、都市機能の充実と経済成長が重視され、埋立てや航路開削がなされ、物流拠点・工業地帯・火力発電所・ゴミ処分場が形成された。一九八〇年代から一九九〇年代にかけては親水機能が重視されアミューズメント施設を備えるウォーターフロントが各所に形成された。また、一九九〇年代から今日にかけては、環境保全への関心が高まるなかで環境保全活動が活発化しており、東京湾への新しいかわりも芽生えている。

このように、東京湾は、戦後から今日に至るまで、その時代の東京湾に対する社会的欲求を満たすべく開発されてきたといえる。その結果として、海辺の多くは人工海岸となり、市民が近付くことができない海辺も多くなった。こうした歴史のなかで、人とマハゼとのかかわりも大きく変化してきた。

本稿では、戦後から今日にかけて東京湾の自然と沿岸社会が変化するなかで、人とマハゼのかかわりがどのように変遷してきたのかを明らかにする。以下では、まず、

第二章においてマハゼの生態的特徴と資源利用、そして東京湾の環境変化について概説する。第三章では釣り（陸釣りおよび船釣り）、第四章では漁業における人とマハゼのかかわりの変遷について明らかにする。そして、最後に第五章では以上を整理しつつ、人とマハゼのかかわりを再生していくことの意義と「東京湾再生」の課題について考察したい。

なお、本稿は、吉野暢之（二〇〇五）「東京湾におけるマハゼ利用の社会史」（東京海洋大学修士学位論文）の内容をもとに工藤が再構成・加筆して取りまとめたものであり、全体の文責は工藤にある。

一・マハゼの生態的特徴と東京湾の環境変化

（一）マハゼの生態的特徴と資源利用

国内では北海道南部から本州・四国・九州にかけての河川下流部に自然分布

マハゼ (*Acanthogobius flavimanus*) は、スズキ目ハゼ科マハゼ属に分類される魚で、

国内においては北海道南部から本州・四国・九州にかけての内湾や河川下流部に自然分布している。海外においてはアムール川河口、朝鮮半島沿岸、渤海・黄海にも自然分布しており、またアメリカのカリフォルニアやオーストラリアのシドニー湾周辺には船舶のバラスト水に入って移入し定着している。

産卵期は冬で、雄が砂泥質の海底にY字形の巣穴を掘って、雌雄がそのなかで産卵

東京湾では四月から六月に孵化し七月から八月になると成長し、ハゼ釣りが盛んになる

する。雄は産卵後も巣穴にとどまり卵を保護する。産卵後一か月ほどでふ化し、仔魚は浮遊生活をおくるが、成長にともない接岸し底生生活をおくるようになり河川の淡水域まで進入するものもある。水温が低下する秋になると徐々に深場へと落ちていき、多くの個体は一歳で成熟し産卵後に死ぬが、成長の悪い個体のなかには二歳で成熟するものもある。

東京湾におけるマハゼの生活史と資源利用の模式図を図1に示した。東京湾では四月から六月に孵化した仔魚が接岸し、沿岸の浅場に着底する。七月から八月になると七〜一〇cm程度まで成長し、河口や運河、埋立地周辺の浅場では、陸釣りによるハゼ釣りが盛んに行われる。この頃は摂餌が活発であり、簡単にハゼを釣ることができるため、老若男女問わず、多くの人がハゼ釣りを楽しむことができる。九月から一〇月になると一〇〜一五cmに成長し、それに伴い徐々に深場（三〜五m）へと移動するため、船釣りやボート釣りが主となり、各流入河川の河口周辺が主な漁場となる。一一月以降はさらに深場（七m以深）へと移動し、それに合わせて船釣りで操業する海域も水深の深いところへと移っていく。また、水温の低下とともに摂餌量が減少するため、釣りの難易度が高くなるが、その難しさの中に独特の魅力があり、ベテランの釣り師を楽しませる。また、この頃になると一五〜二〇cmに成長し、天ぷらだねや正月料理の甘露煮用の素材として市場価値が上がるため、漁業による漁獲も行われる。その後、翌年四月までには産卵を終了し、大部分は生活を終える。

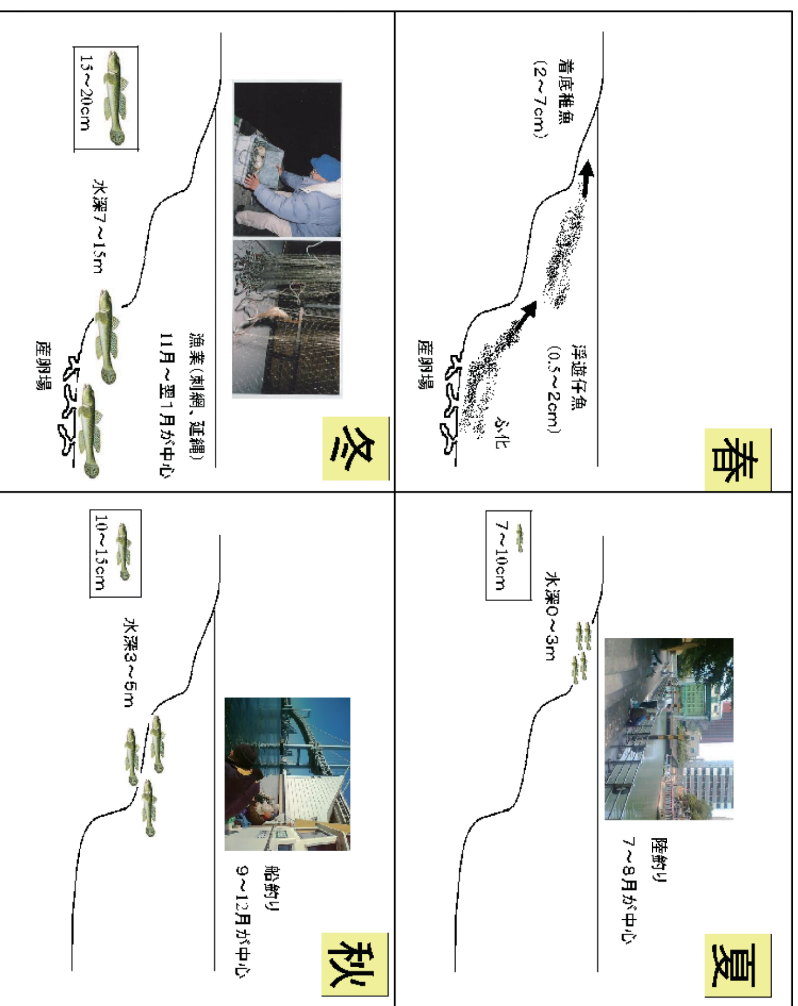


図1 東京湾におけるマハゼの生活史と資源利用

以上のように、マハゼは東京湾の沿岸から水深一五m以浅を主な生息域としており、夏場は陸釣りで手軽に釣れる身近な魚であるが、こうした浅場は埋立てや浚渫といった人為的環境改変の影響を強く受けるという特徴をもっている。

(二) 東京湾の環境変化

東京湾の湾奥部は、かつては沖合まで伸びた広大な干潟が存在していた。日本最古とされる釣りの専門書である「何羨録」(一七三三年)には湾奥の釣り場が詳細に記述されているが、それによると現在も存在している三枚州から西に、中ノ州、出州、関ノ州、黒鯛州、初州、天王州(現天王洲)という大きな州が存在し、そのやや沖合には前州と奥ノ州が存在していたことが分かる。これらの州と州の間は自然の湊筋みなすじがあり、潮の干満によって海水が流れていた様子が想像できる(文末資料1)。

東京都地先海面全体の六四%が水深五m以浅で、生物生産性の高い海域であった

東京湾の埋め立ては江戸時代から始まっていたが、明治三三年(一八九九年)に農商務省が調査した東京湾漁場調査報告による内湾漁場図を見ても「何羨録」の時代と大きくは変化していないことが分かる(文末資料2)。この漁場図を見ると、隅田川河口部はシジミの漁場があり、それよりやや沖合にアサリ、ハマグリ、カキの漁場がある。その沖合の水深が一―三ヒロのところではエビ・桁網漁場が形成され、それより沖合は打瀬網漁場となっている。東京都地先海面全体の六四%が水深五m以浅であり、生物多様性と生物生産性の高い海域であった。この豊穠の海は、沿岸の人々の生活に

とってなくてはならない存在であり、人と東京湾とのかかわりが、そして東京湾を介した人と人とのかわりが濃密な時代であったことがうかがえる。

明治期から今日にかけての東京湾の埋立面積の推移を図2に示した。以下ではこの図を参照しながら明治から今日にかけての東京湾における埋立の歴史を振り返ることとする。

明治から今日にかけての東京湾における埋立の歴史を振り返る

明治初期には隅田川の洪水が多発し、それにより大量の土砂が河口域に堆積することとなり小型船の入港も困難になった。そこで永代橋下流から台場の外側までの滞筋を浚渫することになり、この浚渫土砂の処分を兼ねて月島や新佃島が埋め立てられることになる。その後、明治四〇年(一九〇七年)に東京港が第二種重要港に指定され、五〇〇〇トンクラス的大型船が入港可能にするためにさらなる浚渫工事と港湾施設用地が埋め立てられていった。大正一二年(一九三三年)には関東大震災が起り、その復興にあたり東京港へ的大型船の入港が増加することになった。また東京の経済発展によって港湾としての重要性が高まることとなり、昭和一六年(一九四一年)には国際貿易港として開港することになった。また、昭和六年(一九三一年)には羽田空港が開港されることになり、五三haが埋め立てられ、その後昭和一四年(一九三九年)まで拡張工事も実施されている。

その後、太平洋戦争に突入することとなり、東京港の拡張や埋め立て事業も中止に追い込まれた。戦前までに埋め立てられた埋立地の面積は東京一〇〇〇ha、千葉二〇

東京都は一九五一年に東京港が特定重要港に指定され、国際貿易港としての物流機能の強化が進められる

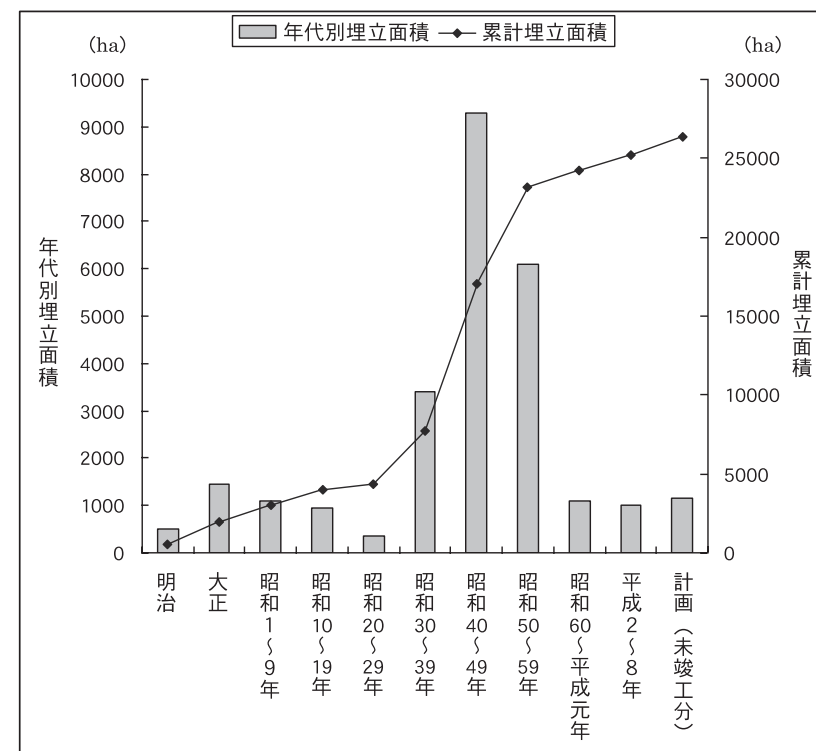


図2 東京湾における埋立面積の推移

注：埋立面積の数値は竣工ベースの数値で示す。

資料：運輸省第二港湾建設局（現、国土交通省関東地方整備局資料）資料より作成

○ha、神奈川二五〇〇haであり、神奈川と千葉は埋立地の八〇％以上が工業地帯となつたのに対して、東京は五〇％が物流拠点であり工業地帯は二〇％に過ぎない。また、大型船の入港を目的とする航路開削は、隅田川下流からお台場までの滞筋に限定されていた。

戦後、昭和二五年（一九五〇年）に港湾法が制定され、地方自治体が港湾管理者となつた。これにより、東京都、千葉県、神奈川県のそれぞれが個別の目的をもって、戦後復興から高度経済成長期そして今日に至るまで東京湾を開発していくこととなる。

東京都は、都市機能の充実と都市問題の解決を目的に開発が進められていくことになる。一九五一年に東京港が特定重要港湾に指定されたことを皮切りに、国際貿易港として物流機能を高めるべく港湾整備を重点にして埋め立てとその周辺の航路開削が進められた。また、高度経済成長を背景とする都市への人口と産業の集中によって住宅不足、電力不足、ごみ処分問題、住宅地における工場問題が起り、こうした都市問題を解決するべく埋め立てが進められた。具体的には、江東区辰巳、^{しのめ}東雲、有明、台場、大井コンテナ埠頭（平和島、昭和島、城南島、京浜島を含む）、^{あおみ}青海コンテナ埠頭、品川埠頭、豊洲埠頭、晴海埠頭等がこの時代に埋め立てられた埋立地である。一九七〇年代半ばからは、ごみ処分場として江東区若洲、中央防波堤地区が埋め立てられ、また羽田空港の沖合拡張も進められてきた。

神奈川県と千葉県は、工業化による経済発展に重点が置かれ、京浜工業地帯、京葉工業地域を発展させるべく埋立地が造成され、企業誘致も積極的に行われた。これらの埋立開発は、埋立にかかる費用を埋立地を利用することになる企業がその分譲価格を予納金として県に納付させて埋立工事が実施されてきたケース（いわゆる「千葉方式」）が多いことが特徴的である。

以上、戦後から今日に至るまでの埋立てと航路開削にともなう水深の変化を図3に整理した。明治三〇年頃（一八九七年）、昭和三年（一九五六年）、平成一二年（二〇〇〇年）と埋立地造成によって海面が縮小していき、さらに航路開削によって水深が深くなってきたことが一目瞭然である。なお、二〇〇〇年の図には示されていないが、羽田空港はD滑走路の新設にともない埋め立てが行われており、また中央防波堤付近もさらに沖に新海面処分場が埋め立てられつつある。新海面処分場が東京都の最後の海面ごみ処理場となっており、東京都地先海面は最早これ以上埋め立てる海面がないほどまでに埋め立てられてきたといえる。

このように東京湾開発によって都市機能の充実や経済発展がもたらされたが、それと引き換えに、干潟を含む水深5m以浅の海域の多くが消滅することとなった。人工護岸の多くは直立護岸であり、海岸形状の多様性は損なわれ、生物多様性も損なわれることになった。浅場に生息するマハゼにとって不適な環境になったことは言うまでもない。また、埋立地である工業地やコンテナ埠頭は私有地であるため一般市民の立

東京湾開発によって都市機能の充実や経済発展がもたらされたが、引きかえに干潟を含む水深5m以浅の海域の多くが消滅

東京都内湾における埋立ての推移と水深の変化

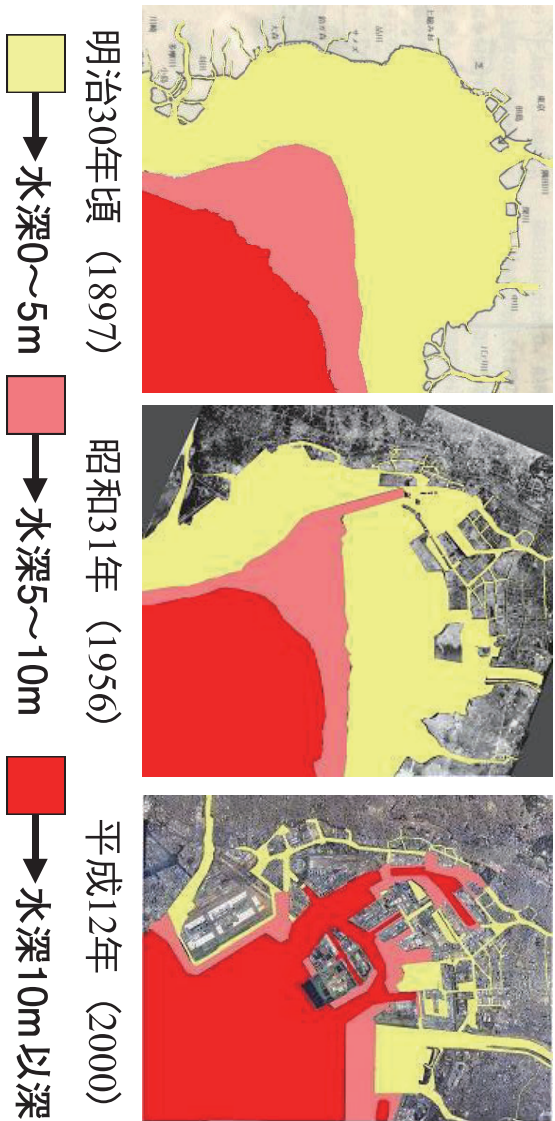


図3 東京都内湾における水深の変化

資料：「東京都内湾漁業興亡史」、東京港港内航空写真および海上保安庁海図より作成

ち入りが不可能な場所が多くなり、人と東京湾との接点も失われてきたといえる。

埋立地を含めて東京湾は、今日においても我々の生活になくってはならない存在であることはいうまでもない。ただし、埋め立てにより生活の場と海との距離が遠くなるにつれ、東京湾とのかかわり、さらには東京湾を介した人と人とのかかわりを日常において実体として意識されることは少なくなってきたのではないだろうか。

三・東京湾におけるマハゼ釣りの変遷

(一) 陸釣りの変遷

陸釣りは庶民の楽しみ、船釣りは金持の大名遊びであった

ハゼ釣りは、江戸時代から盛んで、陸釣りは庶民の楽しみ、船釣りは金持ちの大名遊びであった。まずは、庶民の楽しみであった陸釣りが戦後からどのように変わってきたのかを見ていこう。その際に以下の二つの点に注目したい。ひとつは、東京湾の陸釣りのなかでハゼ釣りがどのように位置づけられてきたのかという点である。もうひとつは釣り場がどのように変遷してきたのかという点である。

これらの実態を把握する資料として、釣り情報誌「月刊つり人」の掲載記事を用いた。「月刊つり人」は、一九四六年（昭和二十一年）に創刊された釣りの総合雑誌であり、今日に至るまでボリュームが大きく変わることがなく、また特定の釣りに趣向が偏るということがないため、上記二点を把握するのに適した資料であるといえる。方法と

としては、「月刊つり人」の各号において掲載された東京湾（ここでは富津岬と観音崎を結ぶ線より内側）の陸釣りに関する記事について、その対象魚種と釣り場を記録し、年ごとに対象魚種別の記事数、釣り場別記事数を集計した。ハゼ釣りについては釣り場を神奈川県（横須賀―川崎）、羽田周辺（羽田―品川）、深川周り（隅田川―夢の島）、三枚洲周辺（葛西―浦安）、行徳周辺（行徳―船橋）、木更津方面（千葉―富津）の六つの地域に分けて集計した。

東京湾の年間記事数（ハゼ釣りとその他）と掲載魚種数の動向を図4に示した。

一九五〇年代までは年間記事数・年間対象種数とも横ばい推移、マハゼ、クロダイ、スズキ、アオギス、ボラなどが対象

一九五〇年代までは、年間記事数・年間対象種数とも変動はあるが横ばいに推移している。当時は、埋め立ても一部海域に限られ、沿岸部は広大な浅場が広がっており、そこに生息するマハゼ、クロダイ、スズキ、アオギス、ボラなどを対象に釣りが行われていた。当時の記事の写真をみると、老若男女が入り交じって竿を出しており、現在のような特定の人々（釣り愛好者）によるレジャー（余暇活動）というよりは、日常生活の延長上に釣りという身近な楽しみがあったのではないかという印象をもつ。そして、ハゼ釣りは身近であるがゆえ（季節になればどこでも釣れる）に記事としての価値は低く、それゆえに記事数が少なかったのではないかと推察される（当時の他の記事を見ると関東郊外の溪流釣りや東京湾口・外房・相模湾の記事が多い）。

その後、一九六〇年代には、東京湾において埋め立てや航路開削等が進行し、釣り場の環境も大きく変化するわけであるが、年間記事数・年間対象種数が増加傾向となっ

一九六〇年代以降は埋め立てや航路開削等が進行し、釣り場が消失したが、新規の釣り場が生まれ

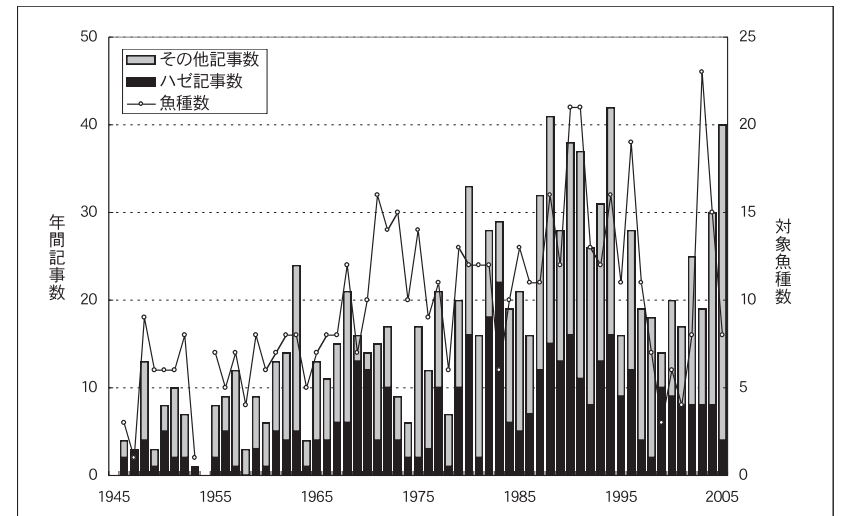


図4 東京湾の陸釣りの年間記事数と対象種数の動向

資料：「つり人」（1946—2005）

ている。埋め立ては、それまで釣り場であったところの消失を意味するが、その一方で埋立地という新規の釣り場が誕生することも意味しており、それが年間記事数の増加に結びついている。大井コンテナ埠頭が完成した際には「新大陸」として新しい釣り場が紹介されている。また、埋立地は、人工護岸であること、沖合にあり水深が深いことから、それまで東京湾内湾ではあまり釣れなかった魚種も対象魚となり（メバル・カサゴ・メジナ等）、年間対象種数が増加傾向となっている。そのなかでもやはりマハゼ釣りの記事数の占める割合は高く、依然として東京湾の陸釣りを代表する釣り物であった。なお、アオギス釣りは、一九五〇年代はじめから生息環境の悪化により釣り場が東京都地先から千葉県地先へと変わっていき、一九六八年を最後に以降記事が皆無となっている。

その後、一九七〇年代半ばには年間記事数が減少している。当時は、人口の増加による水質汚濁のピークであり、「お化けハゼ」（腫瘍状病変…実際には水質汚濁とは無関係であるという説が有力）騒動がマスコミを賑わしていた。また一九七三年から一九七六年にかけて東京湾で漁獲されたスズキが水銀汚染のため出荷停止となっている。こうした東京湾の水質悪化によるイメージダウンによって釣り記事が少なくなっ

たと考えられる。とりわけハゼ釣りの記事数は減少している。その後、下水道整備や水質規制により水質が改善されると一九八〇年代からは記事数も増加傾向に転じることとなる。一九八〇年代半ばになると、埋め立て地はウオー

今日の東京湾の陸釣りにおいて、ハゼ釣りは代表的というより数多い釣り物の一つになっている

ターフフロントとしての親水機能が注目されることとなり、遊歩道、親水公園、海釣り公園などが整備されることになり、年間記事数・対象種数はさらなる増加傾向を示している。また、ルアーフィッシングのブームによりスズキをシーバスと呼ぶ若い釣りが増えるなど、釣りの多様化の進展が年間記事数・対象魚種数の増加の要因となっていると考えられる。その結果、ハゼ釣りの記事数が依然として多いものの、一九九〇年代半ばからは記事数が減少し、占める割合も低下している。今日の東京湾の陸釣りにおいて、ハゼ釣りは代表的な釣り物というよりは数多い釣り物のひとつになっているといえよう。

次に、ハゼ釣りの釣り場の変遷を図5から見ていこう。この図は年代別釣り場別の述べて記事数をまとめたものである。一九四六年から一九五五年は深川周りの記事数が占める割合が高いが、他の場所ではハゼ釣りが行なわれていなかったわけではない。この時代は人為的な環境改変は一部地域に限定されており、沿岸一帯にマハゼは生息し、沿岸に生活する人々がその地先で釣りをしていた（吉田（一九四九））。その中で深川周り（具体的には月島や佃島）の記事数が多いのは、この界限がよく釣れる釣り場であったことに加えて、その他の沿岸部とは異なる町並みや風情があり、わざわざマハゼを釣りに出かけていくだけの価値を有していたからであろう。

一九五六年から一九六五年には深川周りの埋立地において埠頭等の港湾施設ができたことで立ち入り禁止となる釣り場が多くなり、その記事数は著しく減少することと

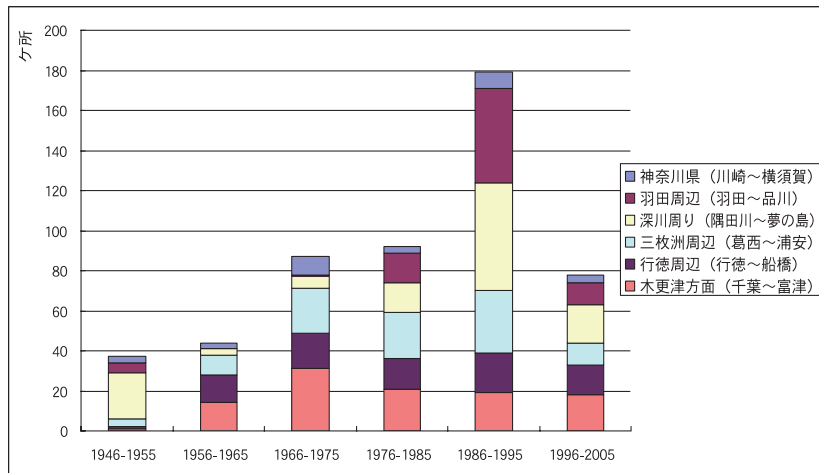


図5 陸釣りによるハゼ釣り関連記事における延べ釣り場数（地域別）の経年変化（1946年～2005年）

資料：月刊つり人

埋め立てや航路開削によって都市部の釣り場が減っていく一方で郊外の行楽としての釣りが一般化していく

なる。それに替わって三枚洲、行徳周辺、さらには木更津方面といった千葉県の釣り場の記事数が増加している。当時、埋立てや航路開削によって都市部沿岸の釣り場が徐々に失われていく一方で、交通機関の発達により都市部から郊外に釣りにいくという行楽としての釣りが一般化していく中で、千葉県の釣り場を紹介する記事が増加していったと考えられる。一九六六年から一九七五年は記事数が増加しているが、その内訳は大きな変化は見られない。この頃は、高度経済成長期にあり、次々に埋立地が形成され、沿岸一帯でマハゼが釣れるという状況ではなくなり、マハゼが釣れる場所が限定されていくなかで、ハゼ釣り場の記事の価値があがっていったといえよう。

一九七六年から一九八五年は、羽田周辺の記事数が増加することになる。具体的には城南島、平和島、京浜島、京浜運河、京浜つばさ公園など、大井コンテナ埠頭周辺の釣り場の記事が多い。また深川周りの記事数も再び増加しているが、これは一三号地（お台場）、夢の島、若洲などの埋立地である。これらの地域では運河や河川沿いに遊歩道や公園が整備されるなど、親水機能を重視したウォーターフロントの再開発が行われ、それまでは立入禁止で一般の人が入れなかった場所に入れるようになったことから、釣り場として紹介されるようになった。この時代は、毎年ハゼ釣りのシーズンが近づくとハゼ釣り場を紹介する特集が組まれており、最早、どこでもマハゼが釣れるという状況ではなくなっている。また、この時代は、観光レジャーが多様化していくなかで、釣りは沿岸住民にとって唯一の娯楽ではなくなり、陸釣りによるハゼ

釣りも庶民の遊びというよりは釣り人（愛好者）の娯楽という色彩が強くなった。

一九九六年から二〇〇五年は、釣り場に大きな変化はないが、記事数が減少することになる。この時代は、釣り人の趣向の細分化Ⅱマニア化が起こり、先にも述べたようにスズキのルアーフィッシングの記事数が多くなる一方で、比較的誰でも釣れるマハゼの記事数は少なくなった。マハゼの記事も、初心者や家族向けの内容か、オールドファン向けの内容が多くなっている。

以上のように、東京湾の陸釣りにおけるハゼ釣りの位置づけは、一九五〇年代までは生活の場に近いところに生息するマハゼを釣って楽しむという庶民の娯楽であったが、埋立てや航路開削によって釣り場が失われていくなかで身近な娯楽ではなくなっていた。かつては夏になれば沿岸一帯でハゼ釣りをする姿を見ることができたのだろうが、現在では人々が生活する場から離れた埋立地の遊歩道や公園がハゼ釣り場となり、釣り人以外の一般の人がハゼ釣りの光景を目にすることは少なくなった。

また、人のハゼ釣りや釣りに対する価値認識も戦後から今日にかけて大きく変化してきたといえる。今日、釣りは行楽やレジャー（余暇活動）として位置づけられるようになり、そうしたなかでハゼ釣りは多くの釣り物のひとつとなっている。さらには釣りそのものが多様にあるレジャーの一種目となり、庶民の娯楽から一部の愛好者の娯楽へと変化している。今日においても陸釣りという人とマハゼのかかわりが存在しているが、一九五〇年代と比較すると釣り場も釣り人も少なくなり、かかわりの規模

東京湾のハゼ釣りの位置づけは、一九五〇年代まで庶民の娯楽であったが、埋め立てなど釣り場が失われて身近な娯楽ではなくなつた

東京都内湾におけるマハゼ漁場の変遷（船釣り）



図6 東京都内湾における船釣りによるマハゼ漁場の変遷

資料：聞き取り調査による

船によるハゼ釣りのシーズンは晩夏から初冬、釣り場は浅場から深場へ、東京湾沿岸では正月にマハゼの甘露煮を食べる食文化があり、十二月も釣り客が多い

は年々縮小しているといえる。

（二）船釣りの変遷

では、次に東京湾における船釣りによるハゼ釣りの変遷について見ていこう。船によるハゼ釣りのシーズンは晩夏から初冬にかけてであり、釣り場は浅場から深場へと変化していく。最盛期は数釣りが楽しめる九～一〇月であるが、東京湾沿岸では正月にマハゼの甘露煮を食べる食文化があり、一二月も釣り客が多いシーズンである。

東京都内湾における船釣りの釣り場の変遷を図6に示した。これは一九五六年、一九八六年、二〇〇五年の航空写真をもとに遊漁船業者への聞き取り調査によって作成したものである。一九六〇年頃までは夏から初秋にかけては沿岸一帯が釣り場であり、晩秋から冬にかけては、沖に設置されている海苔養殖棚の周辺が格好の漁場となっていた。しかし、一九六二年の漁業権全面放棄により海苔養殖棚は撤去されることになり、またその後東京港の埋立てと航路開削により浅場が失われていき、釣り場が大幅に減少した。一九八〇年代には夏から初秋にかけては朝潮運河周辺のみが釣り場となり、晩秋から冬にかけては羽田沖や中央防波堤沖が釣り場となっていた。その後、一九八〇年代後半から羽田空港の再拡張や中央防波堤外側埋立地の造成等によってこれらの釣り場は無くなり、東京都の地先海面においては朝潮運河周辺のみとなり、釣り場の面積は一九五六年当時と比べると一四分の一以下になってしまった。

ハゼ釣り客数の経年変化をみると一九六〇年まで平均一〇〇尾を割る年は少く、いわゆるハゼの「ハゼの束釣り」が実現されていた。一九七〇年代も平均尾数は維持されている

さて、現在も東京都地先海面において、通称「深川周り」と呼ばれる埋立地の間に存在する運河筋や隅田川河口の一部がマハゼの釣り場として利用されている。この釣り場では、船頭が櫓を操り客は和竿でハゼを釣るという昔ながらの伝統を守る船宿も存在する(図7)。この「練り釣り」と呼ばれる釣りは、昭和三〇年代のハゼ釣りともまったく姿を変えていない。そうした差別化によって古くからのハゼ釣り愛好者を顧客としている船宿もある。

図8の一九五〇年から二〇〇五年までの一日一人当たりの平均釣獲尾数と東京湾におけるハゼの船釣り客数の経年変化を見ると、一九六〇年までは平均釣獲尾数が一〇〇尾を割る年は少なく、いわゆる「ハゼの束釣り」が実現されていた。この頃には年間約五〇万人がハゼの船釣りをしていた。しかし、一九六〇年を境として平均釣獲尾数と船釣り客数は減少傾向となり、一九八〇年代前半には五〇尾前後、年間約一〇万人にまで減少した。一九八〇年代以降、平均釣獲尾数は五〇尾を維持しているが、船釣り客数は減少傾向にあり、二〇〇〇年代からは一万人を割り込むまでに至っている。

一九八〇年代には、先にのべたように東京都地先海面においてハゼの釣り場は減少していたが、図8を見ると平均釣獲尾数は維持されている。これは、一九七〇年代に遊漁船が小型の木造船から大型のFRP船へと替わり遠方の釣り場へも行くことが出来るようになり、東京の遊漁船業者は地先海面ではなく千葉県木更津方面を主たる釣り場として利用していたことが要因である。



図7 深川周りの練り釣り(現在)
資料: 深川・富士見HPより引用

遊漁船が小型の木造船から大型のFRP船に替わりアジ、サバ、タチウオなど沖合を釣り場とする対象に加わった

そして、このFRP船の登場は、マハゼの船釣り客数が減少する要因にもなっている。遊漁船が小型の木造船であった時代（無動力船も多く存在していた）は、船宿の地先海面で釣ることができたマハゼ、マコガレイ、シロギス、ボラ、スズキ、クロダイくらいに釣り物は限られていた。それが大型のFRP船に替わり機関の馬力数も大きくなるにつれて、アジ、サバ、タチウオ、メバル、イシモチ、タコ類、イカ類などといった沖合を釣り場とする釣り物も対象となり、釣り方も餌釣りだけではなくルアーフィッシングによるフッコ、タチウオ釣りなど、新たな船釣り対象魚種も加わった。

図9は、東京湾遊漁船業協同組合に所属する船釣り業者（現在一九業者）の対象種別年間釣り客数の経年変化である。年間の釣り客数は一九七〇年代後半から増加傾向となり一九八〇年代後半には一五万人を超えるが、一九九〇年代からは減少に転じ、二〇〇〇年代からは五万人を横ばいに推移している。対象種別に見ると、一九七〇年代には中心の対象種であったマハゼは一九八〇年代後半から減少傾向となり、二〇〇〇年代には全釣り客数の約三%を占めるにすぎないまでに縮小している。一九九〇年代以降は、漁船の大型化の傾向はより顕著になり、また釣り人の趣向の多様化もあり、対象種が多様化している。

このように対象魚種の多様化が進んだ中、かつては代表的な秋の釣り物であったマハゼは船宿にとっても、また釣り客にとっても、多数ある選択肢の中の一つに過ぎない

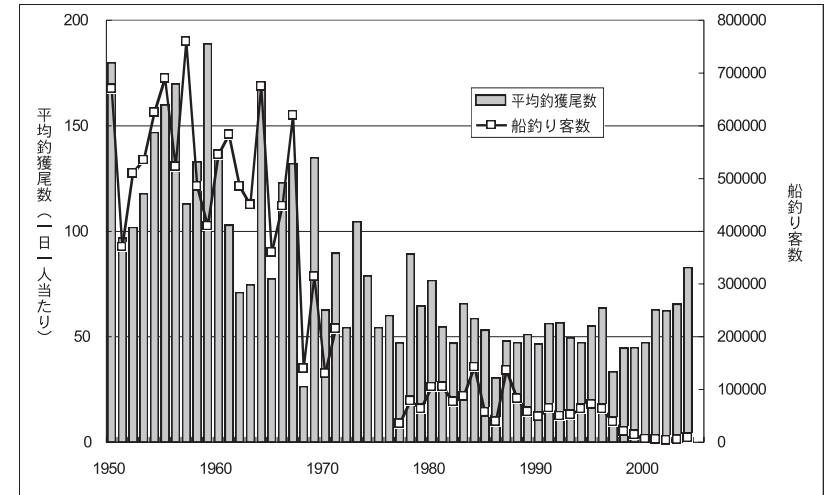


図8 東京都内湾におけるマハゼの平均釣獲尾数と船釣り客数の経年変化

資料：1）1950年～1959年は深川周り（江戸前）のみ（東京大学農学部水産学科水産資源学研究室資料）

1961年～1971年は深川周り（江戸前）および三枚州周辺（江戸川尻）のみ（東京大学農学部水産学科水産資源学研究室資料）

2）1972年～2005年は東京湾全体（週刊つりニュースより作成）

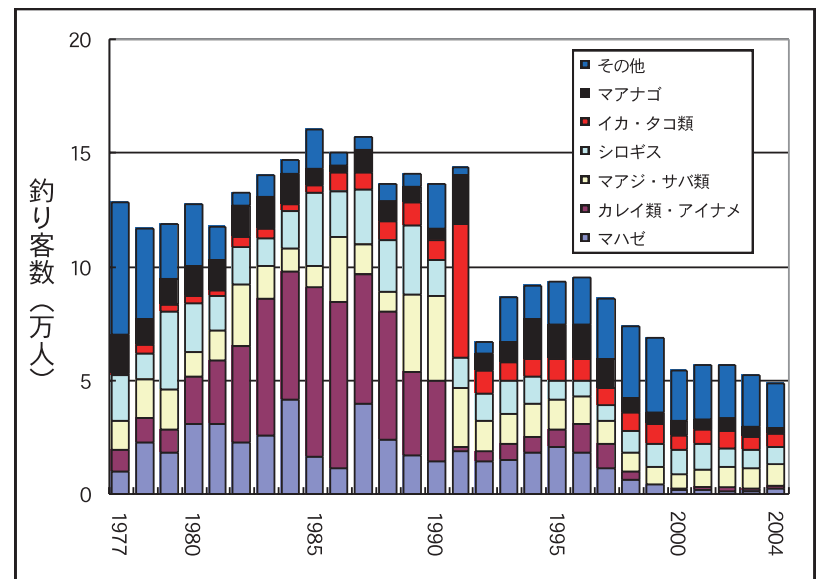


図9 東京湾内湾における船釣りの対象魚種別釣り客数の経年変化

東京湾のマハゼ船釣りは、江戸時代は金持ち旦那衆の娯楽として存在していたが、戦後から高度経済成長期に職場や近所の人などの大衆娯楽へと変化した

くなったと考えられる。さらに、一九九〇年代には釣りブームがあったが二〇〇〇年代にはそれが終焉し船釣り客全体が減少傾向となるなかで、ハゼ釣りをする船釣り客数は減少する傾向にある。

以上のように、東京湾のマハゼの船釣りは、江戸時代にはいわゆる金持ち旦那衆の娯楽として存在していたが、戦後から高度経済成長期には職場や近所の人などの親睦の場となり大衆の娯楽へと変化したものの、埋立てや航路開削にともなう釣り場の減少や一九八〇年代からはレジャーが多様化するなかで船釣り客数は減少し、今日においてはハゼ釣りを好む一部の船釣り愛好者による趣味へと変化してきたといえる。

四．東京湾におけるマハゼ漁業の変遷

東京湾では、一九五〇年代までその豊穡の海を活かして多様な漁業が営まれていた。沿岸部の干潟域では、アサリ、シオフキ、ハマグリ、バカガイ、カキ、サルボウを対象とした採貝や桁網、ボラ、スズキ、クロダイ、シラウオ、エビ類を対象とした刺網、投網、手繰網、それにノリ養殖が営まれていた。沖合ではカレイ類、イワシ類、アナゴ、シロギス、サワラ、エビ類などを対象とした延縄、手繰網、打瀬網、流網が営まれていた。当時、マハゼは一本釣り（九〇一〇月）、はえ縄（九〇一二月）で主に漁獲され、漁場が深くなる初冬には打瀬網や桁網にも混獲されていた。

東京都内湾におけるマハゼ漁場の変遷（漁業）



図 10 東京都内湾におけるマハゼ漁場の変遷

一九五〇年代においてはマハゼは東京湾を代表する魚種のひとつであったが、マハゼ漁業の位置づけはそれほど高いものではなかった

この時代においてマハゼは東京湾を代表する漁業対象種のひとつではあったが、アサリ、ノリ、エビ類の漁獲量が多く、魚類のなかでもボラ、クロダイ、イワシ類の漁獲量がマハゼを上回っていた。沿岸部においてマハゼは個体数の多い魚種であったと考えられるが、効率的に大量に漁獲する方法がないこと、さらに沿岸部に生活する人々にとっては自ら釣りを行うことによって容易に手に入る魚であったことから、漁業においてマハゼ漁業の位置づけはそれほど高いものではなかったようである。

その後、一九五〇年代後半には各地で埋立計画が策定され、また工場排水による漁業被害（本州製紙江戸川工場排水問題など）があり、そして一九六〇年代になると埋立てや航路開削によって漁場環境が著しく変化するなかで、漁業の多様性は失われていった。このように漁場の生物多様性と生物生産性が損なわれていく一方で、一九六二年には東京都海面における漁業権の全面放棄によって漁業生産力が壊滅することになり、東京湾の漁業は衰退を余儀なくされる。

この間の東京都地先におけるマハゼ漁場の変遷を図10に示した。一九六〇年頃までは船釣りと同じように各流入河川の河口部および海苔養殖棚の周辺を中心に多くの漁場が存在していた。その後、高度経済成長期には埋立てと航路開削により多くの漁場が失われていき、一九九〇年代以降も羽田沖を中心とした残存漁場が利用されているが、羽田空港や中央防波堤の拡張により、残された漁場がさらに縮小している。このように東京都地先海面におけるマハゼ漁場の面積は、一九四六年当時と比べ八分の一

東京都のマハゼ漁獲量は明治後期は五〇〇トン程度、大正期は一〇〇トンを超えるようになっていた。漁業者全面放棄の一九六二年以前は一〇〇トンから三〇〇トンあったが、その後激減、二〇〇三年には五トンにまで落ち込んだ。

以下にまで縮小している。漁業においては先に見た船宿のように千葉方面に出漁するというような対応はとられていない。また、現在は羽田空港と中央防波堤の拡張工事によりこの周辺は漁場として利用できなくなっており、江戸川・荒川の河川下流部と運河が主たる漁場となっている。

東京都におけるマハゼの漁獲量の経年変化を図11に示した。これ以前の明治後期には五〇〇トン程度であったが、大正期には一〇〇トンを超えるようになっていた。そして漁業権全面放棄の一九六二年以前は一〇〇トンから三〇〇トン程度の漁獲があるが、その後は激減している。一九八〇年代前半には再び増加し、五〇トンを超えるが、その後は増減を繰り返しながら減少を続け、二〇〇三年には五トンにまで落ち込んでいる。

漁業者への聞き取り調査によると、現在、東京湾でマハゼ漁業を行っているのは二〇人程度である。マハゼは刺網で漁獲しており、かつての主漁法である一本釣りやハエ縄は行われていない。聞き取り調査を行った一人名中八名が六〇歳以上であり、高齢化も進んでいる。

漁業者によつて水揚げされたマハゼは、一九六〇年代前半までは佃煮業者か魚屋に直接販売することが多く、漁獲の多い日には市場へも出荷されていた。毎年秋になると沿岸の魚屋でマハゼはよく見られた魚であった。また、冬になると沿岸の漁師町は歩く隙間もないほど焼きハゼが天日干しされていたとのことである。これは出汁に使

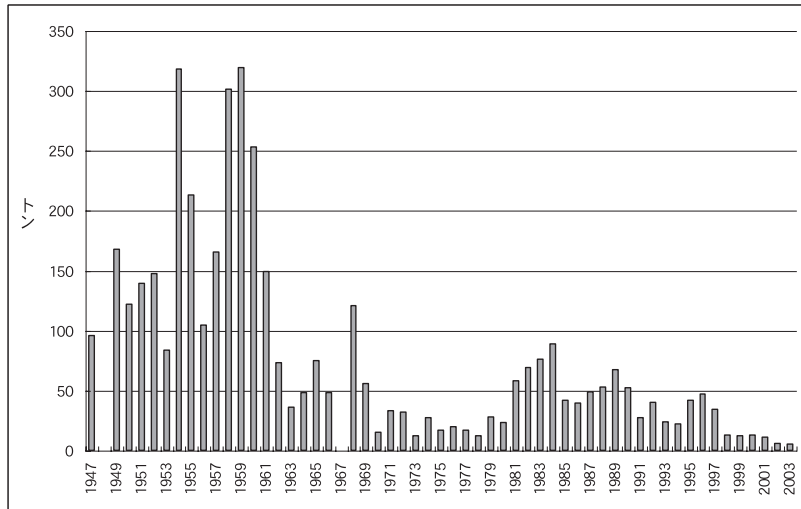


図11 東京都内湾におけるハゼ漁獲量 (1947年～2003年)

資料：1) 1947年～1959年…東京都の水産（東京都産業労働局）
 2) 1960年～2003年…東京農林水産統計年報（農林統計協会）
 注：1948年および1967年は欠番

現在は漁業者はなじみの料亭に直接販売、二五〇〇～六〇〇〇円/kgの値が付くという。マハゼの漁場は消滅し、人とマハゼの関係も縮小した

われたり、甘露煮に使われたりする。先にも述べたように東京都内湾の沿岸部では、ハゼの甘露煮は正月料理に欠かせないものであった。また、屋形船を兼業していた漁家は、予約が入るとその前日や当日の朝に延縄でハゼを漁獲し、お客に出していたようである。この当時、ハゼはどこにでもいる雑多な魚として扱われていたようで、現在のように高級な天ぷら屋や料亭などでハゼが出されることはあまりなかったようである。

しかし、一九六〇年代半ば以降、東京湾全体の漁獲量が減少するなかで、マハゼの消費は減退していく。佃煮加工業者も他産地の原料を調達するようになり、マハゼは漁獲量が少なくなったためあまり利用されなくなった。また、マハゼが売られていたような沿岸部の魚屋も少なくなっていた。現在は、漁業者は、なじみの料亭などに直接販売しているケースが多く、二五〇〇～六〇〇〇円/kgの値が付くという。東京湾沿岸の人々にとって、かつては安価で手に入る馴染みの魚であったマハゼは、一般の人には簡単に手に入らない高価な魚になってしまった。

以上のように、戦後から今日にかけて、埋め立て等によってマハゼ漁場の多くは消失し、東京湾という豊穡の海を存立基盤としていた漁業も壊滅的な状態となり、人とマハゼの関係は縮小してきた。さらに、こうした人とマハゼのかかわりの縮小は、マハゼを介した人と人のかかわりも縮小してきたことを意味している。

五. おわりに

—人とマハゼのかかわりの再生にむけて—

これまで見てきたように、戦後から今日にかけて、東京湾は、その時代の社会的欲求を満たすべく開発が行われてきたといえる。ただし、沿岸の人々はこうした開発行為をなすすべもなく受け入れてきたわけではない。戦後から漁業権が全面放棄される一九六二年までは、漁業者による埋立て等の漁場改変に対する抗議・反対運動が行われてきたし、一九七〇年代からは沿岸部の住民によって自然保護活動としての環境運動も活発化した。また、一九九〇年代後半には釣り人が中心となって有明北地区埋立て（通称十六万坪）に対する反対運動も行われた。

しかし、こうした環境運動は、経済発展や都市機能の充実といった社会的欲求Ⅱ「最大の幸福」を満たすことが正当化されるなかでは埋没せざるをえなかったといえよう。東京湾という生物多様性と生物生産性の高い海域を活かして生きていくとする沿岸住民の欲求は軽視されてきたのである。その結果、今日においても我々の生活は東京湾なくしては存立しえないものの、漁業・釣り・食といった人と東京湾との直接的なかわりは希薄化し、東京湾を介した人と人との有機的なかわりも希薄化してきた。

漁業者による埋立などの漁場改変に対する抗議反対運動は行われてきたが「最大多数の最大幸福」を満たすことが正当化された中で埋没せざるを得なかった

地球環境問題に関する社会的関心が高まる中で「東京湾再生」をスローガンにしたさまざまな取り組みなされている

東京湾とのかかわりが希薄化すれば、東京湾の自然環境を維持・改善していこうとする原動力は失われていくはずである。が、しかし、今日、地球環境問題に対する社会的関心が高まる中で、「東京湾再生」をスローガンとした様々な取り組みが官・民・学のそれぞれにおいて、またその連携・協働によって活発化している。

二〇〇二年には、関係省庁と七都県市を構成メンバーとする東京湾再生推進会議が設立され、二〇〇三年には「東京湾再生のための行動計画」が策定された。この計画は、「生態系を回復し、多くの生物が棲みやすい水環境となるよう、環境の保全・再生・創造を図り、自然と共生した首都圏にふさわしい東京湾を目指す」ことを目的に、「快適に水遊びができ、多くの生物が生息する、親しみやすく美しい「海」を取り戻し、首都圏にふさわしい「東京湾」を創出する」ことを目標としている。そして、目標達成のため、一・陸域負荷削減策の推進、二・海域における環境改善対策の促進、三・東京湾のモニタリングという三つの施策を推進していくこととしている。マハゼに係する部としては、二・の取り組みのひとつに「海域の浄化能力の向上」があり、「干潟・浅場・海浜・磯場を保全・再生・創造するとともに、長期的な観点から相互ネットワーク化を図る」こととなっている。二〇一〇年三月に公表された「第二回中間評価報告書」によれば、二〇〇三年から二〇〇八年の六年間において、人工海浜等を造成することによって「東京湾全体で高度経済成長期以降に失われた干潟・藻場の面積の二割（二八ha）のうち、約二〇％を回復」したとのことである。さらに、今後も「沿

岸生態系創出の更なる推進」を図っていくことになっている。

こうした「東京湾再生」の流れの中で、二〇〇八年にはマハゼの再生を目標とする「江戸前（ハゼ）復活プロジェクト」が始まっている。東京水産振興会、国土技術政策総合研究所の研究者を事務局としている

また、こうした「東京湾再生」の流れのなかで、二〇〇八年には、マハゼの再生を目標とする「江戸前（ハゼ）復活プロジェクト」が始まっている。構成メンバーは、（財）東京水産振興会と国土技術政策総合研究所の研究者を事務局として、行政、研究者、NPOといった多様な関係者によって構成されており、著者の工藤もメンバーになっている。このプロジェクトは、ハゼの復活を目標にして、一・ハゼの棲み処さがし、二・再生の戦略検討、三・ハゼの棲み処づくりという三つの具体的な取り組みになっている。まだ、全ての取り組みを実施するには至っていないが、「ハゼの棲み処さがし」として市民参加による釣り大会が開催されたり、稚魚調査や巣穴調査などが進められている。

このように二〇〇〇年代からは、マハゼの生息環境を悪化させるような乱開発には歯止めがかかる方向にあり、極めて部分的ではあるがそれを改善するような取り組みが行われるようになってきている。こうした動きは、東京湾への社会的欲求が経済発展から環境保全へと重心を変えつつあることを意味していると考えられるが、これはこれまでの東京湾に対する社会的欲求を損なうことなく、そのうえでさらに環境保全という新しい社会的欲求を満たすべく東京湾を改変していこうとするものである。

それでは、何故この時代にこのような変化が生じたのであろうか、その原動力は何なるものなのであろうか。これは、一般的に言われているように、「行き過ぎた開

東京湾再生の意義は、自然を再生させるだけではなく人と自然とのかわり、ひいては人と人とのかわりの再生にあると思われる。

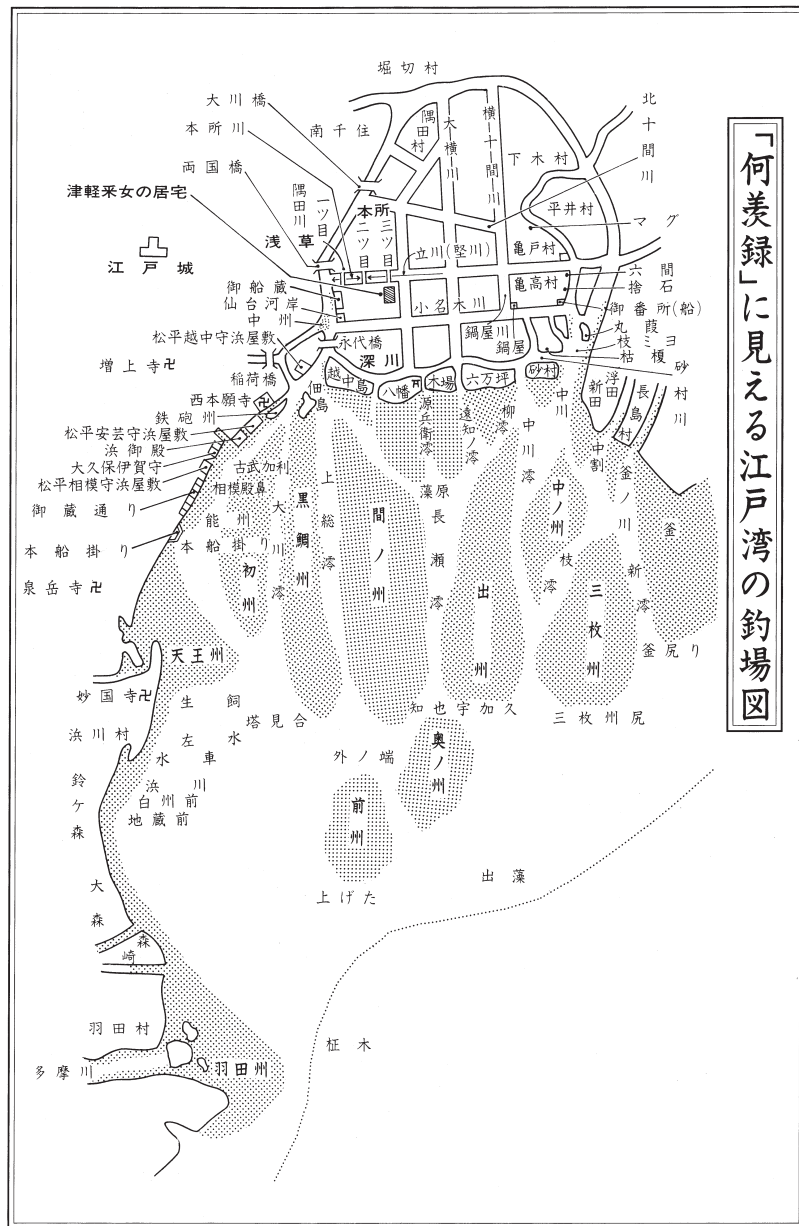
発への反省」や「地球環境問題の深刻化」によって国民の環境に対する関心が大きくなっていくことが一因となっていることは間違いない。しかし、こうした認識のみでは、我々にとって望ましい東京湾の姿を描くことは出来ないのではないかと考えられる。

東京湾の自然との直接的なかわりが希薄化し、また東京湾を介した人と人との有機的なかわりが希薄化している我々にとって「東京湾再生」の意義は、自然を再生させるということだけではなく、人と自然とのかわりの再生、ひいては人と人とのかわりの再生にあると思われる。それにより「東京湾再生」へと向かわしめる原動力と真の理念を醸成していくことが求められているのではないかと考えられる。

文献

- ・加納光樹、小池哲、河野博（二〇〇〇）東京湾内湾の干潟域の魚類相とその多様性、魚類学雑誌、四七（二）、一一五―一二九。
- ・桑原連、竹内博治（一九八七）生活史から見たマハゼの環境保全、横浜市立大学総合研究第四号。
- ・柵瀬信夫（一九九七）二つの海浜公園の特性について、経済と貿易（一七四号）。
- ・清水誠（一九八四）東京湾の魚介類（一）昭和三〇年代の生物相、海洋と生物、三〇（Vol.6-No.1）

- ・（株）週刊つりニュース（一九七二～二〇〇五）週刊つりニュース。
- ・水産庁漁場資源課（二〇〇五）東京湾再生検討委員会報告書。
- ・Takizawa, K, H. Murata, M. Ikawa, M. Nakamura, and T. Nakamoto (1994) On the diet of yellowfin goby (*Acanthogobius flavimanus*) of a mud flat area at the mouth of the Kutanabe-gawa brook, Yamaguchi. *J. Shimomoseki Univ. Fisheries*, 42(3), 137-146.
- ・（株）つり人社（一九四六～二〇〇五）月刊つり人。
- ・東京都港湾局（二〇〇三）東京港の埋立事業の変遷と新海面処分場計画について。
- ・東京都水産試験場（一九八五）昭和五五～五八年度東京都内湾生息環境調査報告書――東京湾奥部におけるマハゼの産卵生態について――、都水試出版物、三三七、一―六五。
- ・東京都内湾漁業興亡史刊行会（一九七二）東京都内湾漁業興亡史。
- ・東京湾再生推進会議（二〇〇三）東京湾再生のための行動計画（最終とりまとめ）。
- ・東京湾遊漁船業協同組合（一九七七～二〇〇四）東京湾における船利用客数調査。
- ・永田一脩（一九八七）江戸時代からの釣り、新日本出版。
- ・日本科学者会議（一九七九）東京湾、大月書店。
- ・沼田眞、風呂田利夫他（一九九七）東京湾の生物誌、築地書館。
- ・檜山義夫（一九六九）釣りの科学、岩波新書。



資料1：永田一脩（1987）江戸時代からの釣り，新日本出版より

- ・ 檜山義夫（一九八二）魚釣るころー釣りの論評，東京書籍
- ・ 檜山義夫、宝月欣二、佐伯有常、中村亀太郎、三田豊一、古井戸良雄、戸田雄平、大内茂（一九七三）東京湾ハゼ不漁原因研究会報告書
- ・ 藤井克彦（二〇〇四）江戸前の素顔，つり人社
- ・ 吉田英雄（一九四九）東京近郊ハゼ釣場，月刊つり人，一九四九年九月号
- ・ 吉野暢之（二〇〇五）東京湾におけるマハゼ利用の社会史，東京海洋大学修士学位論文
- ・ 若林敬子（二〇〇〇）東京湾の環境問題史，有斐閣

